

中公文庫

夢の上

夜を統^すべる王と六^きつの輝^{しょう}晶 3

多 崎 礼

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

● 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

● 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

● 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

幕間（六）

9

第五章 光輝晶

11

幕間（七）

226

第六章 闇輝晶

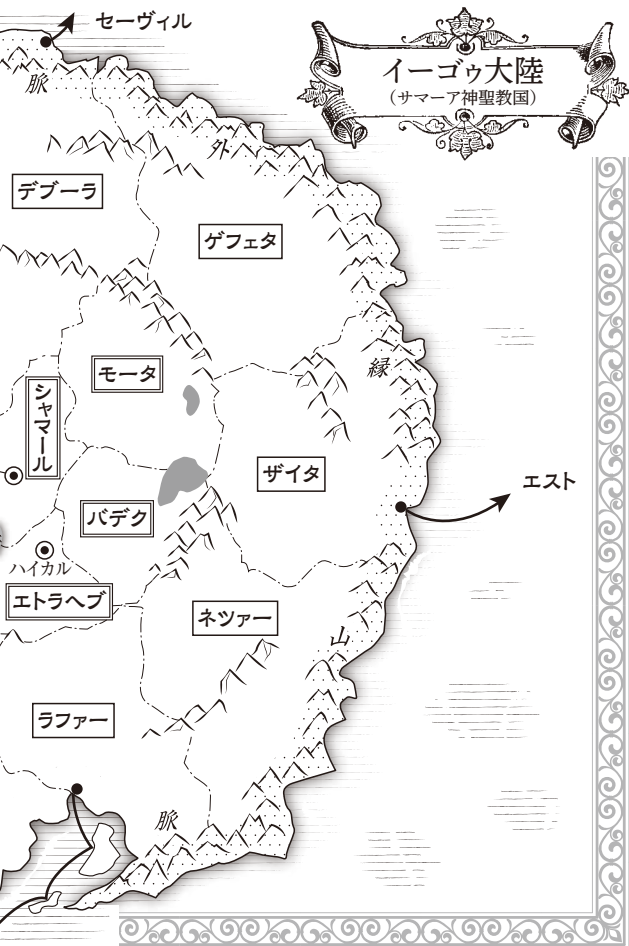
229

終幕

419

あとがき

427



聖教会直轄領

十諸侯領



ジャヌウプ諸島

夢の上
夜を統^すべる王と六つの輝^き晶^{しょう}
3

幕間（六）

残り二つとなった宝玉。

夢売りはそのうちの一つを手にした。

「叶^{かな}わないとわかつていても、忘れられない夢がある。万に一つの可能性を信じ、捨てられずにいる夢がある。人の夢に限界はなく、それが果てることはない。けれど人の時空は有限で、終わりの時がやってくる」

彼の掌^{てのひら}に載せられた白い宝玉。

それは彩輝^{さいき}晶^{しやう}の中でも最も貴重で、最も美しいとされる光輝^{こうき}晶^{しやう}。

「悲しみによる傷も、憎しみによる歪^{よこしま}みも、迷いによる曇りもない夢。それは単純であるがゆえに忘れ難く、純粹であるがゆえに深く心を蝕^{むしば}む。夢と呼ぶには純真すぎる、本能にも似た無垢なる願い」

夢売りは光輝晶を両手で包み、そつと息を吹きかけた。

その指の間から白い光が溢れ出す。

百の蠟燭^{ろうそく}。

千の光木灯^{こうぼくとう}。

一万の篝火^{かがりび}。

それよりもさらに目映い、苛烈な光。

真夜中の広間に現れた、燦然と輝く真昼の太陽。

「子にとって親は太陽。力強く温かい、無償の光を与えし者。太陽に変わるものなど他にない」

淡々とした夢売りの声。

掌に生まれた峻烈な光に包まれ、その姿は白く霞んでいる。

「これは怒りと憎しみと慟哭の末、それでも太陽を求めた貴方の『見果てぬ夢』」

ぼたり……

ぼたり……

水の滴る音が聞こえる――

第五章 光輝晶

岩壁から地下水がしみ出してくる。湿り気を帯びた^{よど}ぬれた空気。黴^{かび}と埃と腐った水の臭い。地下牢には窓も明かりもない。室内を照らすのは鉄扉^{てつび}の向こう側から差し込むわずかな光だけ。石の寝台に体を横たえ、私は目を閉じる。眠ってしまおう。

もう何も見たくない。何も考えたくない。夢を見よう。時が来るまで夢を見ていよう。

遠くの方から靴音が響いてくる。誰かが石の階段を下り、廊下を歩いてくる。

それが鉄扉の前で止まった。錠前が外される重たい音。何者かが牢内に入ってくる。

「起きろ」

老いた^{しわが}噎れ声に、私は渋々目を開く。

すぐ側に男が立っている。曲がった腰。長く伸びた白髪。目深^{まぶか}にかぶったフード。背後に明かりを背負っているため、顔は見えない。

「明日正午、刑が執行される」

淡々とした声音で老人は告げる。

「その前にすべてを話せ。お前が見聞きし、思い描いた夢のすべてを」

「——私にかまうな」

呻うめいて、私は目を閉じる。

「眠らせてくれ」

「お前にはまだ時空が残されている。未練を残したまま死ねば、お前の夢は闇輝あんきしやう晶となる。それでもいいのか？」

私は再び目を開いた。

老人が身につけているのは金の縁飾えんしきりがついた紫紺しこんの長衣。黴臭い文書館に棲すみ、偽りの歴史を編纂へんさんする歴史学者の衣だ。

「話しても無駄だ」

低い声で私は呟いた。

「歴史学者の仕事は、光神王のため、偽りの歴史を書き残すことだ。私が夢を語ったところで、それは記録には残らない」

「記録に残すためではない。私が知りたいのだ」

熱っぽい口調で歴史学者は言う。

「すべてを話してくれたなら、その札に、よいものをやろう」

「よいもの？」

明日の正午には処刑されるといふ私に、いったい何をよごそうというのか。

苦笑する私に、執拗しつように老人は言いつのる。

「自らの行いを悔いているのなら、すべて吐き出してしまえ。お前自身も、心のどこかで、それを望んでいるはずだ」

私は静かに息を吐いた。

彼の言う通りかもしれないと思った。

誰かに聞いて欲しかった。誰かに告白しなかった。

長い間、胸に秘めてきたこの想いを。ずっとずっと隠してきた、私の本当の夢を。

「いいだろう」

どうせ記録には残らないのだ。何を話すも自由だろう。

私は身を起こし、石の寝台に腰掛けた。

「私には夢があった。それはとても美しく輝いていて——どうしても諦めることが出来なかった」

高いところが好きだった。

高いところに登ると、遠くがよく見えたから。

眼下に広がるのは王都ファウルカ。肩を寄せ合うようにして連なる四角い建物。天気の良い日には町並みの先に広々とした平原が見えた。

うねうねと続く丘陵。木々の生い茂った森。それが見たくて、屋根に登っては怒られた。木に登っては怒られた。石垣に登っては怒られた。

それでもやめられなかった。

城壁の外、町並みの向こう、はるか遠くに広がる世界。そこに行ってみたくと思った。広々とした草原を息が切れるまで走ってみたく。深い森の中を探検してみたく。まだ見たことのない世界を見て、いろんな人と話がしてみたく。

ある日、図鑑を見ていて、いいことを思いついた。もし鳥のように空を飛ぶことが出来たら、私はここから出て行ける。遠くまで飛んでいっても夕食までには戻ってこられる。きっと誰にも気づかれない。

私は鳥の真似をして手を羽ばたかせた。両手を広げて全速力で走ると、体が浮きあがるような気がする。なかなかいい感じだ。でも私は知っている。鳥の雛だっていきなり飛ぶことは出来ない。何事にも訓練が必要だ。

まずは低いところから始めよう。

私は裏庭にある橋の欄干らんかんによじ登り、そこから天に向かって飛んだ。鳥のように手をばたかせる……暇もなく落ちた。小川に突っ込み、しかも両膝を擦り剥いた。びしょぬれのままベソをかいていると、母さまが慌てて駆け寄ってきた。

私の無事を確認した後、母さまは安堵あんどの息をつき、それから怖い顔で私を叱った。

「だから高いところに登っちゃ駄目だって、いつも言っているでしょう！」

アルティヤは呆れながらも、私の膝に薬を塗ってくれた。

「お元気なのはよいことだとも、アライス様は本当に生傷が絶えねえですだなあ」

膝の痛みを堪こたえながら、私は光神サマーアに祈った。

神さま、神さま、どうか私に翼を下さい。ここを飛び出して、遠くの地平まで飛んでいかれ

るよう、強い翼を授けて下さい。

けれどどんなに祈っても私の腕は人のまま、羽が生えてくることもなかった。

光神サマーアは全知全能の神。なのに光神サマーアは、私の願いを叶えては下さらなかった。

「驚いたな」

歴史学者は声を震わせた。驚嘆とも畏怖とも取れる低い声音。

「お前はそんな幼い頃から光神サマーアの存在を疑っていたというのか？」

「疑ってなどいない。心から信じていた。だからこそ光神サマーアが私の願いを叶えて下さらないのは、私のせいなのだと思っていた」

「お前が、女だったからか？」

「ああ……そうだ」

子供の頃は深刻な悩みなどなかった。女に生まれたことに引け目を感じることもなく、そのために引き起こされるであろう災難にも考えが及ばなかった。

そんな私に、母さまは言った。

「良き王になりなさい。国の第一の下僕^{げぼく}となり、国の幸せのために尽くしなさい。民のことを第一に考え、民の幸福と平和を守るためにその身を捧げなさい。そうすれば、みんなが貴方を認めてくれる」

その一方で、彼女は毎晩私に言い聞かせた。

「貴方が女の子であることを誰かに知られたら、貴方も母もアルティヤも殺されてしまいます。だから決して自分が女の子であることを知られてはいけません。わかりましたか？」

母さまは厳しかったが、深く私を愛してくれた。アルティヤは面白い話をたくさん聞かせてくれたし、女官達と遊ぶのも楽しかった。部屋は暖かくて心地よく、朝夕の食事は美味しく、満腹になって潜り込む寝台はいつだって柔らかかった。

それは私にとって当たり前のことだった。天に光神サマーアがおられる限り、この世は平和で喜びに満ち溢れている。この幸せな日々はいつまでも続く。そう信じて疑わなかった。

けれど、世界はゆっくりとその本性を現す。

きっかけは六歳の冬。肌寒い十月の^{テシユリーシ}ことだった。

その日も私は裏庭を駆け廻っていた。息を弾ませ、泳ぐようにして藪^{やぶ}をかきわける。細い小枝がピシピシと顔にあたる。

林を通り抜け、鉄柵沿いに石垣へと向かった。石垣の近くには行っちゃ駄目と言われていたが、駄目と言われれば言われるほど、行きたくなるのはなぜだろう。大人達の目を盗んで石垣の上に立ち、城外に広がる世界を眺めることが、私の密かな楽しみになっていた。

藪が開けた。目の前に私の背丈ほどの石垣が現れる。

そこで、私は足を止めた。

石垣の上に誰かが立っている。鉄柵の向こう側、左手で鉄柵を掴んで、はるか遠くに目を向けている。生まれて初めて見る、私と同じ年頃の子供だった。銀糸で刺繍^{ししゅう}が施された長衣。絹で出来たゆつたりとした下衣。革の靴はぴかぴかで、まだ真新しい。

彼を一目見て、私は直感した。

この子も鳥になりたいのだと。なぜなら彼は今にも石垣を蹴って、飛んでいきそうに見えたから。でも人は空を飛ぶことは出来ない。それは私が身をもって学んだ数少ない知識の一つだった。

だから私は、彼に声をかけた。

「石垣に登ると怒られるんだぞ？」

彼はびくりと肩を震わせて、私を振り返った。

銀色の髪。青い眼。誰かに似ていると思ったけれど、誰だかわからなかった。会うのは初めてなのに、初めて会ったという気がしなかった。

自分のことは棚に上げ、私は彼に向かって言った。

「危ないから石垣の上には登っちゃいけないんだ。見つかったら、お前、母さまに叱られるぞ？」

彼は不思議そうに私を見つめた。

「君が、アライスカ？」

びっくりした。なぜこいつは私の名前を知っているのだろう。急に怖くなった。でも逃げ出して、臆病者だと思われるのは嫌だった。

私は石垣に登ると、鉄柵を挟んで彼の隣に立った。

「鳥になって、遠くまで飛んでいきたいって思っているんだろう？」

「……」

「やめておけ。人の手は飛ぶのに向かない」

「ああ」と答え、彼ははるか彼方の地平に目を向けた。「わかっている」

「ならいい」

私達は黙ったまま、目の前に広がる景色を眺めた。

どこまでも続く光神サマーア。その下に広がる町並み、丘陵、遠く霞かすんだ森。目に見えても、決して触れることの出来ない世界。

ふと胸が熱くなつた。泣きたいような笑い出したいような、不思議な気持ちだった。

それが何だったのか、今でもよくわからない。

ただ、感じた。こいつは私と同じだと。こいつも空を飛びたいと思っているんだ。ここを出て、遠くに行きたいと思っているんだ。

私は思い切って呼びかけた。

「なあ、お前。こっち来て、一緒に遊ばないか？」

彼は探るような目で私を見た。

「……本気か？」

第一離宮の庭に入ってはいけないうと、母さまはいつも言っていた。もし見つかれば間違いく大目玉を喰らう。だから本当は後ろめたかったのだが、私は虚勢きんせいを張って胸を反そらした。

「本気だとも！」

「私がツェドカ・アプレズ・シャマール・サマーアだと知った上で、誘っているのか？」

「……ツェドカ？」

どこかで聞いた名前だ。私は首を捻った。どこで聞いたのか、懸命に思い出そうとした。

「あ、もしかしてパラフさまの子供の——？」

「気づいていなかったのか？」

「うん」

私が頷くと、彼はため息をついた。

なんだか馬鹿にされたようで面白くない。

「初めて会ったんだ。わからなくて当然だろう？」

ツェドカは何かを言い返しかけたが、何も言わずに肩を落とした。

「それで、どうする？」と私は続けた。「お前になら、淡雪茸あわゆきたけが生えてる場所を教えてやってもいい」

淡雪のような白い綿をかぶったキノコ。指先で触れるとしゅわしゅわと溶けていく。それは滅多に見つからない私の宝物だった。それを見せてやると言っているのに、ツェドカはまだ迷っている。

私は裏庭へと飛び降りた。

「来るのか来ないのか、早く決めろ」

一瞬の間を置いて、ツェドカは答えた。

「わかった」

彼は鉄柵を左手で掴み、体半分を石垣の外に浮かせた。もし足を滑らせたら、はるか下まで落っこちる。私は内心ハラハラしながら彼の様子を見守った。

ツェドカは鉄柵の外をぐるりと廻り、こちら側の石垣に立った。

「お前、度胸あるなあ」

私は素直に感嘆した。その勇氣に敬意を表して、彼に手を差し出した。

「来いよ」

ツェドカは私の手を握り、庭に降り立った。急に楽しくなってきた。私は歓声を上げ、林に向かつて走り出した。

次の日も、そのまた次の日も、ツェドカは同じ場所に現れた。私達はすぐに打ち解けた。大人達の目を盗み、一緒に第二離宮の裏庭で遊んだ。木に登ったり、根本の土を掘り返して幼虫を探したり、いろんな種類のキノコを集めたり、樹液に誘われて木の幹に集まってくる虫を捕ったりした。

中でも私のお気に入り、枯れ枝を剣に見立てて騎士の真似をすることだった。

「さあ、こい！ 勝負だ！」

私は木の剣を構えた。ツェドカも木の棒を構える。彼が繰り出す勢いのない突きを私は難なく払いのけた。ツェドカは体勢を崩し、勢いあまってすっ転ぶ。

ずっと第一離宮に閉じこめられていたツェドカは、身体を動かす遊びに慣れていなかった。だから騎士ごっこでは常に私が優位に立った。というか、頭ではとても彼にかなわないとわかっていたからこそ、私は騎士ごっこが大好きだったのだが。

「なんだ、もう降参か？」

「降参はしない」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。